

私は救われたのです

4月17日にお話しして下さった、向谷地先生、伊藤知之さんへ。

原田正平・研究職（小児科医）・青山キャンパス

お二人に感謝を伝えたくて、このレポートを書いています。

私は最初に質問させていただいた、道産子の小児科医です。

仕事の関係で東京に出てきて、今年で11年目になりますが、それまではずっと道内のあちらこちらで、小児科勤務医として仕事をしていましたので、浦河町のことも、べてるの家のことも、ある程度知っていました。

浦河日赤には勤務したことはありませんが、静内町の乳幼児健診のアルバイトにも行っていまし、穂別に親戚がいるので、日高地方はなじみ深い土地と言っても良いくらいでした。でも実は、わかった気になっていた、というべきだったのでしょうか。

お二人のお話も、もちろん真剣に聞くつもりでいたわけですが、お話を聞いているうちに、なぜか熱いものがこみ上げてきて、涙腺がゆるんできたことに自分でも驚かされました。

お二人が特別感動的なお話をしているわけでもないのに、むしろまるで掛け合い漫才のように笑い声が出てくるのに、泣けてくるのです。

何故だろうか。

お二人の話聞きながら、考え続けました。

そうして分かったことがあります。

私は救われたのです。

向谷地先生の話が、伊藤さんの話が、どんな高僧のありがたい説話より、私の心に中にしみ入り、私が小さな頃からずっと抱き続けてきた大きな疑問を見事に解決し、私をとらえていた業のようなものから解き放ってくれたのでした。

その疑問というのは、このようなものです。

私は小さな頃から、競争に勝つように親から期待され、そしてその期待に応えてきた人間でした。競争に勝つと言っても、必ずしも「俺が俺が」と前に出るわけではありませんが、それでも常に、周りの人間を何かの基準で評価し、自分より上、自分より下と区別、差別をしてきたのだらうと思います。自分が勝ち組であるうちは、それでも良かったのでしょうけれど、いつまでも勝ち続けていくことは出来ません。失敗も挫折もあります。

また、結婚し二人の家族となり、子どもが出来て三人、四人、五人の家族となると、自分だけが勝ち続けていても、どうしようもない無い現実にはぶつかります。

赤の他人なら、敗者は切り捨てれば良いのですが、自分の「愛すべき」家族は切り捨てられるはずありません。

そこで悩み始めるのです。人の世の中に、単一の基準による勝者や敗者といった区別、差別を生み続けていったいどうなるのだろうか。勝者だけの世の中などあるのだろうか。敗者は一体どこに行くのだろうか。

小児科医として、患者さんやその家族に向き合っているとき、「優秀な医師」となるためには競争の勝者であることが求められ、しかし、勝者になり得ない「障害者」に寄り添うためには、勝者の傲慢さは不要の資質となります。あるいは傲慢さを持ちながら、不本意ながら「弱者」に寄り添うふりをするのか。いやいや競争の勝者など、そもそも医師の資質ではないのか。いつの間にか、果てるともない迷路に迷い込んでいました。

まあ、いつもいつも迷子でいるわけにはいかないので、自分にとってとても重要なはずの疑問を心の奥底にしまい込んで、勝者と敗者の入り混じった世の中を泳いでいたのでしょうか。

「おはよう」が「あっちいけ」に聞こえても、「伊藤ダンス」が始まっても、べてるの家の人たちは、勝者のはずの人たちがいつの間にか敗者になる優勝劣敗の世の中で、30年しっかり生きてきて、多くの日本人がうちひしがれている3.11の後の世の中で、災害対策の最先端を走り始めている。

そんなことも知らないで、分かった気になった自分がいて、自分が勝者だなんて思っていて、実は心の底で自分が敗者であることを認めたくない自分がいて、自分が敗者なのは、自分を認めようとしないうちの世の中が悪いんだと思いたい、小さな小さな自分がいて、いつも不平、不満を心にため込んでいて。

そんな実はちっぽけな自分であることが、向谷地先生の話、伊藤さんの話を聞くうちに、ああ、そんな自分で良いのだ、頑張らなくても良いのだ、勝たなくても良いのだ、勝ち負けなんてどうでも良いのだ、とそんな感情がわき上がってきて、涙腺がゆるみ、いつのまにか救われていたのです。

とりとめの無い話ですが、とにもかくにも、向谷地先生、伊藤さん、有り難うございました。いつか私の救われた話をべてるまつり「幻覚&妄想大会」で話したいものです。(終)